

第十章

ゴドウィン氏の平等の体系——人間のあらゆる悪徳を制度に帰する誤り——人口から生じる困難に対するゴドウィン氏の第一の返答は全く不十分——ゴドウィン氏の美しい平等の体系が実現したと仮定——人口の原理だけで、わずか三十年という短さで、それは完全に破綻する

ゴドウィン氏の『政治的正義』は、機知に富むすぐれた論考であり、文体には気迫と活力がみなぎっている。その勢いと緊張感、論証の力強さと精緻さ、熱を帯びた思索、そして全体に真実味を与える切実かつ誠実な語り口と切迫した語調が、まず目を引く。しかしそこには、健全な哲学が求める慎重さや方法的厳密さが十分とは言いがたい。しばしば、前提によって裏づけられない、あるいはその射程を超えた結論に踏み込み、自ら掲げた異論への検討や反駁も、ときに行き届かない。現実に応用しにくい一般的・抽象的な命題に過度に依存し、その推論は自然な節度から明らかに逸脱している。

ゴドウィン氏の平等制度案は、示されたどの提案よりも美しく魅力的であり、平等社会の構想としてひとときわ強く人を引きつける。理性と信念だけによって社会を変革しようとする発想は、暴力によって変革を行い、その体制を力で維持しようとするやり方に比べ、はるかに長続きする見込みがある。また、各人が私的判断を無制限に行使できるとする教義も、壮大で魅力的であり、個人を実質的に公権力の従属下に置く制度よりも、明らかに優れている。社会の原動力を自己愛から、慈善や博愛といった利他的な動機へと置き換えようとする発想も、心から望ましい目標であり、ぜひ実現したい理想である。このような美しい構想に触れれば、その実現の時を切望し、喜びと敬意の念が自然に湧き上がるのもつともだ。だが、その時は決して訪れない。全体として夢に近く、想像の産物である美しい幻影にすぎないからである。幸福と不滅の「華麗な宮殿」も、真理と徳の「厳粛な神殿」も、現実の生活に目を向け、地上の人間の実相を見つめれば、「実体のない幻影」のように跡形もなく消え去る。なお、氏は「第八編第三章」の結びで、人口について次のように述べている。

人間社会には、利用できる生存手段や食料などの資源が許す範囲内に人口を抑える仕組みが働いているため、アメリカやアジアに暮らす移動生活や遊牧を営む部族であって

も、いくら長い年月が経ち、多くの世代を重ねても、農耕が不可欠になるほどまでに人口が増えることはない。

ゴドウィン氏はこの原理を、謎めいた隠れた原因と呼ぶだけで、その検証や解明には踏み込もうとしない。結局のところ、それは必要、窮乏、そして窮乏への恐れが支配する苛烈な法則にほかならない。

ゴドウィン氏の最大にして根本的な誤りは、文明社会における悪徳や不幸の大半の原因を人為的制度に求める点にある。氏は、政治上の規律や取り決め、既存の財産制度や確立された財産秩序を諸悪の根源、すなわち犯罪の温床とみなす。もしそれが正しいなら、世界から悪を取り除くことは絶望的ではなく、悪の全廃も十分に視野に入り、しかも理性の力だけで達成できることになるだろう。ところが実際には、制度は害の原因としては目立つものの、その重みは小さく表層的であり、人間の生活の源を腐らせて流れ全体を濁らせる、もっと根深い汚れに比べれば、水面を漂う一片の羽毛にすぎない。

平等制度の利点とそれに伴う利益について論じる章で、ゴドウィン氏は次のように述べている。

圧制や隸従、欺瞞の風潮は、確立された財産制度の運用から生じ、知的進歩を妨げる。

嫉妬や悪意、復讐心もまた、そこから生まれる。一方、自然の恵みを皆で公平に分かち合い、各人の必要が満たされて豊かに暮らせる社会では、こうした感情はしだいに薄れ、利己心は退いていく。乏しい取り分を必死に守る必要も、満たされぬ欲望に追い立てられて不安や苦痛にさいなまれることもないのであれば、人は皆、公共の善を尊重し、自分だけの殻から抜け出しやすくなる。争いの種がなければ、隣人はもはや敵ではなくなり、理性的な政治は思いやりの精神によつて支えられるようになる。人の心は、衣食や生計への絶え間ない心配から解放され、本来の関心に即して自由に思索を深めることができる。人びとは互いに相手の探究を支え合うようになる。

これは確かに幸福で望ましい姿であり、実現すれば申し分のない理想である。しかし現実には、ほとんど具体性も現実味も伴わない空想にすぎないことを、筆者は読者がすでに十分理解し、納得していると見ており、その点をこそ懸念している。

自然の恵みに満ちた豊かな環境にあっても、それだけで社会が安定して存続し、人が安心して暮らせるわけではない。自然の恩恵を万人が等しく分け合うことなどできないからである。財産を制度として管理する仕組みが確立していなければ、各人は乏しい蓄えを力ずくで守らざるを得ず、利己心が優位に立って争いが絶えなくなる。その結果、

人々は常に生活の糧への不安にさいなまれ、自由に思索を広げうる知性など一つとして残らなくなってしまう。

鋭い知性と洞察で知られるゴドウィン氏が、現実の人間社会の実情を十分に踏まえていないことは、人口過剰という難題に対する彼の論法や対処の仕方を見れば明らかである。彼は次のように述べる。

この異議には、遠い将来の困難をあらかじめ誇大に見積もっているにすぎない、という明快な反論がある。世界の居住可能地域の四分の三はいまだ手つかずであり、耕作が進んだ地域にも改良の余地は大きい。たとえ人口増加が何世紀にもわたって続いたとしても、地球はなお人類の生活を支えうる見通しがある。

筆者はすでに、人口が過剰に膨張しても、土地の生産力が完全に尽きる段階に至るまで困窮や困難は生じないとする見方が誤りであることを示してきた。そこで今度は、ゴドウィン氏の平等の理想が可能なかぎり純粋な形で実現した社会を仮定し、その完全な制度のもとであつても、この問題がどれほど早く表面化し、どれほど重く切迫した圧力となるかを検討することにする。現実に応用して機能しない理論は、妥当とも正しいとも言えないからである。

グレートブリテン島から不幸や悪徳の原因となるものがごとく取り除かれた状態を想定してみよう。戦争や争いはなくなり、不衛生な業種や工場も姿を消す。宮廷での駆け引きや思惑、商業上の利害や背徳的な享楽を求めて、人々が疫病の温床となる大都市へ群がることもなくなる。飲酒や賭博、放蕩に代わって、簡素で健康的かつ理性的な娯楽が広く行われる。人の健康を損なうような規模の都市は存在せず、この地上の楽園の住民の多くは、国土に点在する小さな村や農家で暮らす。家々は清潔で風通しがよく、十分な広さがあり、衛生的な場所に建てられている。人々は皆平等で、贅沢を成り立たせるための労働はなくなり、不可欠な農作業は皆で無理なく分担する。島の人口と産出量は現行の水準に保たれ、公平無私の正義に根ざした博愛の精神にもとづき、社会の構成員の必要に応じて産物が分配される。毎日皆が肉を食べるのは難しいとしても、野菜を主とし、ときおり肉を添える程度の食事であれば、儉約を尊ぶ人々の欲求は満たされ、健康と体力、気力も十分に維持できると考えられる。

ゴドウィン氏は、結婚を詐欺的かつ独占的な制度とみなしている。性的関係が徹底した自由の原理に基づいていたとしても、同氏は、それが無差別な交際に行き着くとは考えず、著者もこの見解に全面的に同意する。多数の相手を求める傾向は悪徳で不自然な

墮落であり、質素で徳のある社会ではさほど広がらないだろう。人々はおそらくそれぞれに伴侶を選び、双方の合意が続くかぎり、その関係を保つのである。氏によれば、女性が生む子の数や、その父親を特定することは重要ではない。物資や援助は、ゆとりのある者から不足している者へと自発的に行き渡り、各人は能力に応じて次世代の教育を引き受ける用意があるのだという。（第八編第八章参照。第三版は第二卷五百十二頁）

人口増の観点から見れば、これに勝る社会のあり方は考えにくい。現在の結婚は一度結ばば解消が難しく、その性格ゆえに、多くの人を結婚から遠ざけたり、ためらわせたりしていることは確かである。これに対し、制約の少ない自由な関係は、若年期の関係形成や早期の交際を強く促すだろうし、子の養育や扶養について将来の不安がないという前提に立つなら、二十三歳までに家庭を持たない女性は百人に一人もいないだろうと考えられる。

人口増加を強く後押しする条件がそろい、しかも仮定どおりに人口を減らす要因をすべて取り除けるとすれば、人口は知られているどの社会よりも速く増えるはずである。ブライス博士が引用するスタイルズ医師のパンフレットは、アメリカ内陸の開拓地では住民数が十五年で倍増したと伝えている。イングランドは、そうした開拓地よりも環境

が健康的で、家屋の風通しや衛生状態も良く、婚姻や出産の奨励もより強いのだとすれば、十五年未満で倍増しても不思議ではない。とはいえ、過大評価を避けるため、倍増までの期間は二十五年と控えめに見積もっておく。この増加率は、アメリカ合衆国北部諸州で実際に確認されてきたものとして広く知られている。

財産の平等化が進み、社会の労働の大半が農業に向かえば、国内の生産量は大いに伸びることが見込まれる。しかし、急増する人口の需要に応えるには、ゴドウィン氏の言う「一人一日三十分」では明らかに不足しており、各人が一日の時間の半分を労働に割かざるをえないだろう。それでもなお、土壌の性質や、すでに耕している土地の肥沃さ、未開墾地の不毛さを考え合わせると、今後二十五年間で総生産を倍増できるかどうかは疑わしいと言わざるをえない。見込みが立つのは、放牧地をすべて耕地に転換し、動物性食品の消費をほとんどやめる場合に限られるが、この方策は別の面で逆効果になりかねない。というのも、イングランドの土壌は施肥なしでは高い収量を望めず、最良の肥料を得るには家畜が不可欠だからである。中国には、施肥をしなくとも一年に二度米を収穫できるほど肥えた地域があると伝えられるが、イングランドにはそのような土地はない。

とはいえ、二十五年で島全体の産出量を二倍にするのは容易ではない。しかし、それが達成できたと仮定するなら、最初の期間の終わりにには、食料の多くが植物性であったとしても、人口一千四百万人が健康に暮らすのに十分な食料を確保できるだろう。

では、その次に人口が倍になる時期にはどうか。増え続ける人口の切迫した需要に應える食料を、いったいどこで確保するのか。新たに開墾できる耕地はどこにあり、既存の耕地を改良するための肥料や資材はどこから調達するのか。土地について少しでも知識があれば、後半の二十五年間に国内平均の収量を現状と同じ割合だけ上積みすることは不可能だと認めざるをえない。それでもあえて、到底実現しそうにない増産が起きると仮定してみても、結論はびくともしない。たとえ多くの譲歩を織り込んだとしても、第二期の終わりには七百万人分の食料が不足する。儉約を前提にしても、二千百万人分の食料を二千八百万人で分け合うことになるからである。

しかし、物資があふれる豊かな環境に人びとが暮らし、尽きることのない欲望への不安や苦痛に備える義務から誰もが解放され、利己の狭い論理が影を潜め、衣食の絶えざる心配から解き放たれた心が本性にかなう思索を自由に巡らせる。そうした光景は、現実の厳しさに一度触れれば、たちまち霧散してしまう。華やかな幻想は検証に耐えきれ

ず崩れ去り、豊かさに育まれた慈善の気風は、欠乏の冷たい息に押しやられる。そして、いったん消え去っていた忌まわしい情念が再び姿を現す。自己保存という強力な法則が、柔らかく気高い感情を一掃し、悪への誘惑には人の性は抗しがたい。穀物は熟す前に刈り取られ、不公正な取り分のまま隠匿され、それに伴って虚偽へと通じる暗い悪徳が一気に生まれる。多くの子を抱える母親には支えとなる糧が届かず、子どもたちは栄養不足で病弱になる。頬の健康な赤みは失せ、貧しさゆえの蒼白な頬と落ちくぼんだまなざしが、あたりを支配する。なお幾人かの胸にはかすかな慈愛が残り、わずかな抵抗を試みるが、やがては自己愛がふたたび支配権を取り戻し、勝ち誇って世界を我が物顔に支配する。

ここには、ゴドウィン氏が第八編第三章（第三版第二卷四百六十二頁）で、人間の悪徳の源をそのゆがみに帰して論じたような人為的制度は存在しなかった。その結果、公益と私益の対立は起こらず、本来は共同に委ねるべき利益が独占されることもなく、不当な法が秩序違反を誘発することもなく、博愛の心が人々を治めていたのである。それにもかかわらず、わずか五十年という短い期間のうちに、暴力や抑圧、虚偽や悲惨など、現代社会を蝕み陰らせているあらゆる悪徳と苦難が、人為的規制とは無関係な人間本性

の法則にしたがう圧倒的な必然によって生じたかのように見えるのである。

なお、この陰鬱な予測が現実味を欠くように思われるなら、今後二十五年を見通してみてほしい。その時点で、生計の手段を欠く人びとは二千八百万人に上り、一世紀が終わる前には人口は一億一千二百万人に達する一方で、食料は三千五百万人分にとどまり、七千七百万人分が不足することになる。このような時代には、欠乏が支配的となり、略奪や殺害が横行すると予想される。それでもなお、ここではあくまで地上の生産は無限であり、年々の増加が最大限に樂觀的な試算すら上回る、という仮定を置いているのである。

これは、人口問題をめぐって、人口は増え続け、たとえ幾世紀を経ようとも地球は住民の生活を支える資源を供給し続けられるとするゴドウィン氏の見解とは、明らかに相いれない。

余剰人口として挙げた二千八百万や七千七百万という数字が現実の人数を指すものではないことは、言うまでもない。「人間社会には人口を生存手段の水準に恒常的に抑え込む原理がある」とするゴドウィン氏の指摘は妥当である。残る論点はただ一つ、その原理の実体である。それは、正体のあいまいな隠れた原因なのか、ある時期に男女の生殖

能力を奪う天の神秘的な介入なのか、それとも、観察と検証が可能で、どの社会段階においても程度の差こそあれ常に働いてきたと認められる原因なのか。結論として、それは自然法則が避けがたくもたらす一定の困窮であり、人間の制度はそれを悪化させるどころか大いに緩和してきたものの、完全に取り去ることはできない、ということになる。

仮想の事例に照らすと、文明社会を支えるいくつかの法律は、切迫した必要に押されて段階的に整備されていく。ゴドウィン氏は、人は受ける印象の産物だと説き、欠乏の圧力が続けば、公的備蓄や私的蓄えの侵害はやがて避けがたいものになると見る。違反の件数と規模が増すにつれ、先見の明と行動力を備えた人々は、人口は急増する一方で国家の年々の産出はやがて減り始めると見通す。事態の切迫を受け、社会全体の安全を守るための当面の措置が求められ、ついには会議が開かれて、最も強い言葉で国家の危機が訴えられる。豊かな時期には、誰がどれほど働かず、どれほど少なく持つていても、大きな問題にはならなかった。皆が進んで隣人の不足を補っていたからである。だが今問われているのは、使わずに余っている分を分け与えるかどうかではない。自分の生存に不可欠な食糧を隣人に渡すべきかどうかなのである。欠乏する人の数が、それに応えうる人の数や能力をはるかに上回っていることが示され、国内の産出では到底満たせな

い差し迫った需要が、正義の明白な侵害を生み出している。こうした違反は、すでに食料の増加を妨げており、このままでは共同体全体を混乱に陥れるだろう。抗いがたい必要は、もし可能であるなら何としても年々の生産増を確保せよと迫っているように見える。その第一の、不可欠な目的を果たすためには、土地の分割をさらに徹底し、各人の蓄えを侵害から守るために、死刑を含む最も強力な制裁によって保護するのが望ましい、との結論に至るのである。

反対論はこうである。土地の生産力が高まり、偶然が重なれば、ある者の取り分が生活に必要な分を大きく上回ることもありうる。そのようなとき、利己心が横行していれば、見返りなしに余剰を分け与えることはないだろう。しかし、望ましいことではないにせよ、これは財産の安全が損なわれた場合に必然的に生じる深刻な苦難の連鎖に比べれば、相対的にははるかに小さな害にとどまる。そもそも一人が一度に食べられる量には、胃の容量という厳しい自然の限界がある。残りをむやみに捨ててしまうとは考えにくい。むしろ余剰分を他人の労働と交換し、一定の依存関係が生じるとしても、飢餓に陥るよりはまだましである。

したがって、社会に重くのしかかる悪影響を前にして、現状で取りうる最善ではある

がなお十分とは言えない対策として、先進諸国における運用と大差のない財産管理の枠組みが導入される可能性が高い。

次に検討すべきなのは、直前の論点と深く結びつく性の問題である。社会の困難の根本原因を見据える立場からは、次のように主張される。社会全体の慈善が行き渡り、だれもが自分の子は十分に養われると安心できるようになれば、人口は必然的に増え続ける一方で、大地の生産力では食料を賄いきれなくなる。たとえ社会の関心と労働力をこの課題に集中させ、財産権を徹底的に保護し、多様な奨励策を講じて年ごとに最大限の増産を図ったとしても、食料の増加は人口増加の速さには追いつかない。したがって、人口の抑制が切実に必要であり、その最も自然で明快な手立ては、各人が自分の子の扶養と養育費を自ら引き受けることである。そうなれば、支える手立てのない出産は控えられる、人口増への歯止めとなるとともに、将来の見通しを立てる際の基準としても機能する。それでもなお、この原則に反する行為が行われるなら、抑止と教訓の見地から、軽率な行いによって自分と罪なき幼い子どもを貧困に追い込んだ当人は、不名誉と不利益を受けるべきだとされる。

こうした困難に直面する共同体にとっては、これらの論拠から、婚姻制度を整えるこ

と、少なくとも親が自らの子を扶養する明示または黙示の義務を認めることは、ごく自然で妥当な結論だと言える。

事情を直視すれば、女性が貞操を守らなかった場合に男性より大きな不名誉を負わされてきたのは、当時の条件に根ざした理由があったと考えられる。多くの場合、女性には子を自力で養うだけの資力や手立てが備わっているとは期待されていなかった。扶養の約束を交わさない男性と関係を持ち、その男性が不利益を避けて姿を消せば、子は社会の扶助に頼るか、さもなくば飢えるほかなかった。再発を防ぐため、この種の過ちを身体拘束や刑罰によって処するのは不当とされ、不名誉という社会的制裁で対処するという合意が、男性たちのあいだに形成されたのだと考えられる。さらに、この規範違反は女性の側ではいつそう明白で、誤認が生じにくい。父親の特定は常に可能とは限らないが、母親については不確実性はほとんどない。そこで、証拠が最も確かで、社会への不利益が最大となる側に、より重い非難を負わせる取り決めが生まれたのである。一方で、子の扶養義務は、必要に応じて社会が強制した。家族を持てば避けがたい不便や労苦が増えるうえ、他者に不利益をもたらした者には一定の不名誉が免れない。これらを合わせれば、男性に対しては十分な罰だと見なされたのである。

今、女性がある種の過ちや非行を理由に社会からほとんど排除される一方で、同じ行為をした男性はほぼ咎められないという現状は、公平の観点から見て明らかに不当である。ただし、この慣行が始まった当初について言えば、共同体に重大な不都合が頻発するのを抑えるために選ばれた、分かりやすく単純で、しかも効果的な手段だったという点で、その事情は理解できる。しかし、それを全面的に正当化することはできない。その後、この慣行が生み出した観念や発想の連鎖の中で、もとの出発点は見失われてしまった。もとは国家や統治上の必要から講じられた措置であつたにもかかわらず、今では女性の慎みや品位、さらには貞操といった規範によって支えられ、しかも本来の趣旨からすれば最も必要性が小さいはずの特定の社会層において、かえって最も強く作用しているのである。

財産の安全と婚姻制度という、社会の二つの基盤が整えられると、生活の不平等は避けられない。財産の分配がすでに終わった後で生まれてくる人は、資源が私有化された世界に生を受けることになる。親が大家族を十分に養えないとき、すべてが誰かの所有となっている社会で、その子どもはどのように生きていけばよいのかが問われる。地上の産物を万人で等分すれば、社会に致命的な打撃が及ぶのは明らかであり、初期の配分

の想定を超えて家族が増えたからといって、他者の余剰を「公正」の名の下に当然の権利として要求することはできない。人間社会には避けがたい法則があり、欠乏に直面する人は必ず生じる。いわば人生の籤に外れた人たちであり、やがて求める側の人数が、余剰によって応じうる量を上回るようになる。徳行や道德的功績にもとづいて優先順位を定めることは、一般に判定が難しいため、余剰の持ち主は、より明確で実際的な基準を求めるだろう。特段の事情がなければ、さらなる余剰を生み出す意欲と能力を示す人を選ぶのが自然で妥当である。そのほうが共同体全体は潤い、所有者もより多くの支援を行える。食に窮する人は、生存に不可欠な食糧との引き換えに、自らの労働を差し出すほかなくなる。労働を支える基金とは、地主が自家消費を超えて蓄えている食糧の総量のことである。この基金への需要が大きく、求める人が多ければ、一人当たりの分け前は小さくなり、賃金は低く抑えられ、人々はぎりぎりの糧で働くほかなくなり、疾病と貧困が家族形成や子どもの成長を抑える。逆に、基金の増加が速く、その規模が求める人の数に比べて十分に大きいときには、一人当たりの分け前は厚くなる。十分な食糧という見返りなしに働く者はいないから、労働者は安定してゆとりある暮らしを送り、その子どもは多くが健やかに育つ。

労働者の生活を支えるこの基金の状態は、現代の各国における低所得層の人々の幸福と困窮の度合いを、主として左右している。さらに、その水準が、人口が増加に向かうのか、停滞するのか、あるいは減少へ向かうのかを決定するのである。

たとえば、人が想像しうる限りで最も理想的で美しい社会、すなわち、自己愛ではなく博愛を土台とし、構成員の望ましくない傾向を力ではなく理性によって正そうとする社会であっても、自然の避けがたい法則は働き続ける。そのため人間の先天的な墮落によらずとも、やがては現在知られているどの国家とも本質的に変わらない体制へと、後退ないし変質していくと考えられる。結局のところ、社会は所有者と労働者という二つの階層に分かれ、自己愛こそが巨大な社会機構を動かす主な原動力になる。

本稿で置いた仮定は、人口の増加は控えめに、生産の増加は樂觀的に見積もるというものである。その前提に立てば、人口が既知のどの例よりも速く増えることを妨げる理由はない。人口の倍加期間を二十五年ではなく十五年と仮定し、その短期間に生産を倍増させるために必要な労働を考えてみれば、たとえば理論上は可能であったとしても、ゴドウィン氏の社会制度が最良の形で整えられた場合ですら、無数の世紀を待つまでもなく、人口という単純な原理の力だけで三十年も経たないうちに崩壊するほかない、とい

う結論に至る。

なお、移住の問題に触れないのは、理由がきわめて明白だからである。同様の社会が欧州各地に広がれば、各国が人口問題で同じ壁に突き当たり、新たな受け入れの余地はなくなるからだ。仮に理想の社会がこの島の内部にとどまり続けるとすれば、創設時の純粹さは損なわれ、その掲げる幸福は少数者にしか行き渡らないことになる。すなわち、その社会の根本原理が完全に崩れないかぎり、人びとが自らそこを離れ、現行の欧州諸国の政府のもとへ戻ろうとしたり、新天地への入植初期に伴う過酷な困難をあえて引き受けようとしたりはしないということだ。私たちはこれまでの経験から、人びとが祖国を去る決断に至るまでにどれほど大きな不幸と困難に耐え抜くか、また飢えに瀕する者ですら、新たな移住の誘いをたびたび退けてきたことを知っている。